

事例2：榎野川における流域一体の取組

取組の背景・経緯

榎野川河口部の位置する山口湾は、かつては宝の海と呼ばれていたほどの好漁場であったが、近年、生物多様性の低下や漁場生産性の低下等の問題が顕在化するようになり、こうした状況から、平成15年に、上流域の森林から下流域の干潟や海に至るまでの流域全体を対象とした「やまぐちの豊かな流域づくり構想」が策定された。

平成16年8月には、榎野川河口干潟等の再生の取組を効果的に進めるため、地域住民、NPO、学識者、地方公共団体、関係行政機関などで構成する「榎野川河口域・干潟自然再生協議会」が設立、翌年3月には「榎野川河口域・干潟自然再生全体構想」が策定され、地域の多様な関係者の参画による合意形成と産学官民の連携・協働による取組が始まった。

平成25年12月には、地域通貨を活用した取組が評価され、日本ユネスコ協会連盟が実施する第5回「プロジェクト未来遺産」に登録された。

榎野川流域全体図
出典)「榎野川河口域・干潟自然再生全体構想」平成17年3月、榎野川河口域・干潟自然再生協議会

取組の内容

流域全体を視野に入れ、地域の多様な関係者が連携した干潟再生の取組

<実施体制>

流域にかかわりのある地域の多様な関係者が参加・連携・協力して、自然再生協議会の場で合意形成を図りながら取組を進めている。

取組にかかる費用については、協議会メンバーが独自に財源を確保している。それぞれの取組の実施に伴う科学的なデータの取得・蓄積にかかる費用については、主に山口県が負担している。

「榎野川河口域・干潟自然再生全体構想」に掲げる取組と役割分担（連携・協働体制）

作業項目	作業内容	協議会参加主体				協力参加を願う主体	
		事業実施者	学識者	公募委員		地元自治体	教育機関
				個人	団体		
豊かな泥干潟の再生	●カキ殻粉砕片や堆積砂との混合等による底質改善 ●カキ・カキ殻との共生	○	○	○	○		
豊かな砂干潟の再生	●カフトガニの生育に配慮した干潟耕耘など	○	○	○	○	○	○
カフトガニ産卵場保全	●カフトガニ産卵場所の保全・維持	○	○	○	○	○	○
豊かなアマモ場・浅場の再生	●アマモ場の再生・維持、干潟・浅場・アマモ場の造成 ●親水関連施設（潮干狩り、レクリエーション・自然体験施設等）の整備	○	○	○	○	○	○
豊かな泥浜・レク干潟の再生	●野鳥の館場としての保全、客土等による干潟の再生（一部区域） ●レクリエーション場の設定	○	○	○	○	○	○
豊かな後浜（後背地）の再生	●ヨシ原、鳥類探観場などの保全 ●後浜と干潟を利用した自然体験活動・環境学習等の場の設定	○	○	○	○	○	○
現状干潟の観察・維持	●変化状況の観察、現状干潟の維持	○	○	○	○	○	○
全区域を対象とした共通項目	●課題の解明、再生方法の検討、水環境改善への取組、環境モニタリング ●環境学習・教育、住民参加の仕組みづくり、産学官民のネットワークづくり ●情報の管理・提供等	○	○	○	○	○	○

出典)「榎野川河口域・干潟自然再生全体構想」平成17年3月、榎野川河口域・干潟自然再生協議会より作成

取組の種類 **干潟の保全・再生**

<取組の目標>

○自然再生の目標は、「人が適度な働きかけを継続することで、自然からのあらゆる恵みを持続的に享受できる場、いわゆる『里海』の再生を目指す」とされている。

○その上で、榎野川河口干潟等を自然・社会状況を踏まえて7つのゾーンに区分し、ゾーニングごとに具体的な目標が設定されている。

<活動状況>

○榎野川もり・かわ・うみを再生し、人と人をつなぐプロジェクト

森・川・海でつながる流域をひとつのフィールドとして、住民、事業者、民間団体、大学等が連携・協働した活動を行っている。

上流域での源流の森づくり、中流域でのアユの産卵場づくり、下流域での干潟の耕耘を行うほか、地域通貨「フシノ」を各種活動の実施者に配布することなどを通じて、環境保全と地域活性化を図っている。

自然再生ゾーニング
出典)「榎野川河口域・干潟自然再生全体構想」平成17年3月、榎野川河口域・干潟自然再生協議会より作成

干潟再生（干潟耕耘）の取組と上流域での植林準備（下草刈り）・シラカバ植樹の様子

（出典：榎野川流域地域通貨連携促進検討協議会 提供資料）

取組の成果

○干潟における底生生物相の回復

2004年度にはほとんどみられなかったアサリなどの稚貝やクルマエビの稚エビなどが、2006年の調査でみられるようになり、2008年以降は漁獲サイズにまで成長したアサリもみられるようになった。

○住民参加の活発化

企業の支援による「AQUA SOCIAL FES!!」の開催などを通じて、活動参加者数が増加し、その年代層も拡大するとともに、住民参加が活発となった。

取組のポイント

- 自然再生推進法の枠組みを活用し、上流の森林から下流の海まで流域全体を視野に入れた取組である。
- 取組の基本的なスタンスとして「住民等のできることを、無理なくやれることをやれるところから」を掲げてきたことが、取組が長く続いてきた要因の一つになっている。
- 資金面などの課題がある中で、活動が評価されたこと、企業からの支援が広がったこと、が活動の継続に大きく貢献している。

参考 URL

- 榎野川河口域・干潟自然再生協議会 HP (<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/fushino/>)

2